広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	文字素と音素の対応の指導の効果について
Author(s)	藤原，陽子
Citation	英語教育学研究 ： 金田道和先生退官記念論文集 ： 7 - 21
Issue Date	2004-09-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053652
Right	
Relation	

文字素と音素の対応の指導の効果について

藤　原　陽　子

1. はじめに

拙論（2002）において、語彙の意味提示の方法と定着のための指導法の工夫について述べたが、その項目の一つとして、音と綴りの関係の指導を掲げていた。音と綴りの関係については、語彙を導入した際や、毎時間の授業の Warming-up やまとめの段階で、継続してていねいな指導を積み重ねていくことが大切であるが、ある一定期間集中してトレーニングすることの効果も検証してみたいと思い、今回リサーチを試みた。

2. 予備調査Ⅰ：アンケート

実 施 日：平成14年2月21日5校時
対象生徒：中学1年生37人（予備調査から事後アンケートまですべて出席した22人を分析対象とする）

項目：英語は得意、好き　14人（63.6%）

理由　今ではよくできていると思う。だいたいわかるからおもしろい。（4人）
なんとなく。嫌いな理由がない。（3人）
おもしろいから。英語がしゃべれるようになりたいから。（2人）
全部が好き。（1人）
他の言葉が話せてうれしいから。（1人）
単語とか書くのが好き。（1人）
他の科目より得意。新しいことだから楽しい。（1人）

外国に興味があるから。楽しい。おもしろい。（1人）

英語は苦手	8人（36.4%）

理由　単語が覚えられない。単語の意味や読み書きが難しい。（7人）
全部難しい。（1人）

外国や英語に興味を持ち、英語を話せるようになりたいという希望を持っている生徒やよくわかってできるという自信を持っている生徒は英語に対してプラスの意識を持っている。それに対して、単語が読めない、書けないことが理由で英語に苦手意識を持っている生徒が多いことがわかる。このことから、単語の読み方に対しての指導を行うことによって、英語学習の障害の一つを解決する糸口になると考える。

単語を見てそれを読む（発音する）ことは難しいですか。
（例えば、room という単語を見て[ru(:)m]と読む（発音する）こと。）

ア　とても難しい	1人
イ　少し難しい	7人
イとウの中間	1人
ウ　それほど難しくない	9人
ウとエの中間	1人
エ　とても簡単	2人
無回答	1人

既に習った単語（例えば room ）であれば、それを読むことはそれほど難しくない、あるいはとても簡単と考えている生徒が約50%であるのに対して、8人の生徒はとても難しいあるいは少し難しいと考えている。

はじめて見かけた単語の読み方がわかりますか[1]。

ア　自信を持って読める	0人
イ　だいたい読める	9人
イとウの中間	1人
ウ　ほとんど読めない	12人
エ　読み方を習わないと全く読み方がわからない	0人

だいたい読めるという生徒も9人いるが、ほとんど読めない生徒が約54.5%という結果である。読めないものは覚えることは難しいと考えられる。音と綴りの関係を指導することにより、生徒が単語を覚える際の一助としたい。

3. 予備調査Ⅱ：事前テスト

実施日：平成14年2月21日5校時、平成14年2月25日6校時

分析対象生徒：中学1年生22人

資料：手島（2000）では、英単語を読み書きする基本として、「読み方が一つしかない文字と a, e, i, o, u の一つめの読み方」「読み方が一つしかない“文字のかたまり”の読み方」「a, e, i, y, o, u の二つめの読み方」「c, g の二通りの読み方」「a, e, i, y, o, u, w のうちの2文字の組み合わせの読み方」「a, e, i, o, u と r の組み合わせの読み方」「a, e, i, y, o, u, w のうちの2文字と r の組み合わせの読み方」を掲げているが、今回は、その中でもまず「読み方が一つしかない文字と a, e, i, o, u の一つめの読み方」（Step 1 から Step 9 までに分かれている）の中からテスト項目を取り出した（表1）。これらのテスト項目は、生徒がこれまで教科書の中や授業の中で目にしていない単語ばかりを抽出したものである。これらのはじめて見かけた単語をどれだけ読むことができるのかを事前に面接によりテストし、トレーニングによって結果がどれだけ変わるのかの基準となる資料を得たいと考えた。

表1：テスト項目

Step 1 a, e, i, /t, d, n	Step 4 k, h	Step 7 r, l
① ad	① Kant	① rod
② net	② skip	② risk
③ den	③ ham	③ lid
④ tin	④ hen	④ lip

Step 2 p,b,m	Step 5 f,v	Step 8 同じ文字の連続
① pet	① fit	① add
② nib	② if	② inn
③ dam	③ van	③ sell
④ Ben	④ vet	④ mitt
Step 3 o,u/s,z	Step 6 w,y	Step 9 x
① mop	① wit	① mix
② nut	② twin	② ax
③ sad	③ yet	③ tax
④ zip	④ yam	④ text

4. 音と綴りの関係の指導と事後テスト

一度にまとめて指導することは、かえって生徒に混乱を起こさせるということも考えられるため、Step 1 から Step 4 までと Step 5 から Step 9 までに分けて実施した（Step 1-4 実施日：平成14年2月27日2校時； Step 5-9 実施日：平成14年3月8日3校時）。

ステップごとに説明(提示)及び練習[2]を行い、事前テストと同じ項目で直後テストを行った。

Step 1　a, e , i/t, d, n

a「エア」をなめらかに、「ェア」をすばやく言う感じ

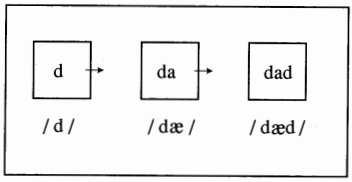
t, d, n の発音のポイントは舌の先を上の歯茎（内側）につけること。

t: 息だけで、勢いよく「トゥッ」。　d:声も添えて、勢いよく「ドゥッ」

n: 舌の先を、上の前歯の内側の歯茎につけて、「ンヵ」。特に単語の最後の n を言うときは、大げさに「ンヌ」という言うつもりで。

練習：it / en / in / at / Ned / Ted / ten / dad

例：



黒板に左のように順次書いていき、一つ一つの音素を付け加えながら生徒に読み方を予測させ、練習する。

以下、Step 2 から Step 9 までの練習方法も同様である。

Step 2　p, b, m

p, b, m の発音のポイントは両唇を閉じること。

p: 閉じた両唇を、息だけで、勢いよく「プッ」。

b: 閉じた両唇を、声も添えて、勢いよく「ブッ」。

m: 両唇をしっかり閉じて「ン」と言おう。息は鼻から抜ける。

練習：pen / bed / man / bat / map / tip / mat / Tim

Step 3　o, u/s, z

o: 口を大きく開けて「オ」。「ォア」をすばやく言う感じ。

u: 口をあまり開かず、のどの奥のほうから「ア」。

s, z の発音のポイントは、息が続く限り伸ばして出せる、ということ。

s: 息だけで、「ス」　　z:声も添えて、「ズ」

練習：top / mud / pot / bud / dot / tub / sun / Zen

Step 4　k, h

k: 息だけで、勢いよく「クッ」。

h: 口の中で次に続く音を言う準備をしておき、そのまま息だけ出す。

練習：kid / hot / skin / hat / desk / hunt / tusk / hand

Step 5　f, v

f, v の発音のポイントは下唇を上の前歯に軽く触らせること。どちらも、息が続く限り、この音を出し続けることができる。

f: 息だけで、「フ」。　　v:声も添えて、「ヴ」。

練習：fin / fat / fan / fun / vend / fist / vest / fund

Step 6　w, y

w の発音のポイントは唇を細く丸めて思い切り突き出すこと。唇を細く突き出して「ウ」。

y の発音のポイントは、「イ」に力を入れて大げさに。

練習：win / web / wet / yes / yen / went / west / swim

Step 7　r, l

r の発音のポイントは、舌の先でのどの奥のほうを触ろうとすること。大切なのは、舌が口の中のどこにも触っていないこと。唇を少し丸めて突き出して「ウ」と言うつもりで。

l の発音のポイントは、舌の先を上の前歯の歯茎（内側）にしっかりつけること。

舌先をつけたままで「ウ」または「オ」と言うつもりで。

練習： rat / red / run / rub / lot / left / land / lump

Step 8　同じ文字の連続

同じ文字が二つ続いても、読むのは1字分でよい。（ただし ee,oo,cc,gg は除く）

練習： well / kiss / press / stiff / Jill / jazz

Step 9　x

x はこれまで習った文字で表せる。x の表す音を（　）に入れて表すと、x＝(ks)

練習：ex / ox / fox / six / box / sax / fix / next

1週間後と2週間後に、表1と同じテスト項目でテストを行った。

Step 1-4　1週間後テスト実施日：平成14年3月6日2校時

Step 5-9　1週間後テスト実施日：平成14年3月15日3校時

Step 1-4　2週間後テスト実施日：平成14年3月13日2校時

Step 5-9　2週間後テスト実施日：平成14年3月22日3校時

5. テスト結果

それぞれのテスト項目を読むことができた生徒の割合は、事前テスト、

直後テスト、1週間後テスト、2週間後テストにおいて、表2のような結果となった。

表2：各テスト項目を読むことができた生徒の割合

テスト項目＼実施時期		事前テスト		直後テスト		1週間後テスト		2週間後テスト	
Step 1	①ad	17人	77.3%	21人	95.5%	22人	100.0%	20人	90.9%
	②net	19	86.4	20	90.9	21	95.5	19	86.4
	③den	17	77.3	21	95.5	20	90.9	17	77.3
	④tin	19	86.4	22	100.0	22	100.0	22	100.0
Step 2	①pet	20	90.9	22	100.0	22	100.0	22	100.0
	②nib	6	27.3	14	63.6	12	54.5	14	63.6
	③dam	14	63.6	17	77.3	17	77.3	16	72.7
	④Ben	21	95.5	22	100.0	22	100.0	22	100.0
Step 3	①mop	21	95.5	22	100.0	22	100.0	22	100.0
	②nut	6	27.3	21	95.5	11	50.0	20	90.9
	③sad	14	63.6	22	100.0	20	90.9	20	90.9
	④zip	20	90.9	21	95.5	21	95.5	22	100.0
Step 4	①Kant	17	77.3	22	100.0	20	90.9	21	95.5
	②skip	21	95.5	22	100.0	22	100.0	22	100.0
	③ham	21	95.5	19	86.4	18	81.8	18	81.8
	④hen	19	86.4	21	95.5	21	95.5	22	100.0
Step 5	①fit	20	90.9	22	100.0	21	95.5	22	100.0
	②if	16	72.7	17	77.3	19	86.4	19	86.4
	③van	15	68.2	21	95.5	21	95.5	21	95.5
	④vet	17	77.3	22	100.0	19	86.4	22	100.0
Step 6	①wit	18	81.8	20	90.9	22	100.0	22	100.0
	②twin	16	72.7	20	90.9	21	95.5	20	90.9
	③yet	14	63.6	19	86.4	15	68.2	19	86.4
	④yam	16	72.7	13	59.1	15	68.2	16	72.7
Step 7	①rod	17	77.3	21	95.5	21	95.5	22	100.0
	②risk	20	90.9	21	95.5	22	100.0	21	95.5
	③lid	16	72.7	21	95.5	21	95.5	22	100.0

	④lip	20	90.9	22	100.0	22	100.0	22	100.0
Step 8	①add	15	68.2	21	95.5	20	90.9	19	86.4
	②inn	17	77.3	21	95.5	20	90.9	20	90.9
	③sell	16	72.7	16	72.7	16	72.7	17	77.3
	④mitt	16	72.7	19	86.4	18	81.8	18	81.8
Step 9	①mix	22	100.0	22	100.0	22	100.0	22	100.0
	②ax	19	86.4	21	95.5	21	95.5	21	95.5
	③tax	16	72.7	22	100.0	21	95.5	22	100.0
	④text	16	72.7	19	86.4	19	86.4	21	95.5

今回のテストでは、nib を[nid]と発音した生徒が事前テストで10名、直後テストで7名、1週間後テストで10名、2週間後テストで5名いた。また、if を[it]と発音した生徒が直後テストで3名、1週間後テスト、2週間後テストでそれぞれ1名いた。文字の視覚的識別のための練習がフォニックスの学習を始める準備段階として必要であることを感じた。それに関連して、ham,yam は、事前テストよりも直後テストの方が読める生徒の割合が減っているが、直後テストでは、ham を[hæn]と発音した生徒が3名、yam を[jæn]と発音した生徒が4名いた。m を n と取り違えたことによるものと考えられる。他にも、1週間後テストの結果が直後テストよりも低かったものの、2週間後テストでは再び上がっているという項目や、直後テストよりも1週間後テストや2週間後テストの結果の方が上がっている項目があるが、そのときどきの生徒のテストを受ける際の集中の度合いや、文字の視覚的識別のミス、逆に、こうしたテストを重ねていくことによる文字の視覚的識別の慣れ等やこのリサーチの間の通常の授業時の指導の影響が起因していると考えられる。また、生徒にとって、nut における u の部分を/ʌ/と発音することは、指導しなければ困難な項目であり、事前テストでは8名の生徒が[nut]と発音していたが、指導の直後には1名を除いて全員が正しく読むことができた。

また、それぞれの生徒の事前テスト、直後テスト、1週間後テスト、2週間後テストにおけるテスト項目(全部で36項目)を読むことができた数の変化は表3のような結果となった。特に、指導の直接的な効果を測りたいと考

え、直後テストにおいては、事前テストと比べてどれだけの変化があったかを(　)内に示した。

表3：各生徒が読むことができたテスト項目の数

実施時期／生徒	事前テスト	直後テスト(事前テストとの差)	1週間後テスト	2週間後テスト
生徒A	32	35　(＋ 3)	34	33
生徒B	20	33　(＋13)	29	34
生徒C	31	34　(＋ 3)	35	36
生徒D	30	35　(＋ 5)	33	36
生徒E	26	35　(＋ 9)	36	36
生徒F	24	33　(＋ 9)	29	28
生徒G	30	35　(＋ 5)	34	36
生徒H	4	31　(＋27)	30	34
生徒I	31	29　(－ 2)	31	33
生徒J	28	32　(＋ 4)	33	34
生徒K	31	32　(＋ 1)	31	27
生徒L	33	33　(± 0)	27	35
生徒M	29	35　(＋ 6)	35	35
生徒N	23	31　(＋ 8)	32	33
生徒O	32	34　(＋ 2)	34	33
生徒P	34	36　(＋ 2)	32	34
生徒Q	31	29　(－ 2)	27	29
生徒R	33	35　(＋ 2)	36	35
生徒S	32	32　(± 0)	32	32
生徒T	28	35　(＋ 7)	35	34
生徒U	18	32　(＋14)	32	33
生徒V	34	35　(＋ 1)	33	34
平　均	27.9	33.2　(＋ 5.3)	32.3	33.4

生徒Ｉは、直後テストで－2となっているが、これは事前テストでは読めていたdam を[dæn]、yam を[jem]と読んでいたことによる。m と n の視覚的識別の必要性と同時に、y の発音のポイントの強調のしすぎを感じた。

生徒Qも直後テストで－2となっている。事前テストに比べて、ad が読めた代わりに、dam を[dæn]、ham を[hæn]、yam を[jæn]と読んでいたことによる。m と n の視覚的識別の必要性を感じた。

その他の生徒については、直後テストと事前テストで変化がなかった生徒が2名いたがそれ以外では全員事前テストよりも直後テストの方が読める項目の数が増えていた。特に生徒Bは＋13、生徒Hは＋27、生徒Uは＋14と変化が著しい。後に触れるが、生徒Hは、事後アンケートの中で「トレーニングをすれば絶対にわかると思う」という感想を寄せている。意識の面においても変化が見られたことがわかる。

直後テストよりも1週間後テスト、2週間後テストの結果の方が良い生徒や、1週間後テストの結果が直後テストよりも低かったものの、2週間後テストでは再び上がっている生徒も見られるが、これもそのときどきの生徒のテストを受ける際の集中の度合いや、文字の視覚的識別のミス、逆に、こうしたテストを重ねていくことによる文字の視覚的識別の慣れ等やこのリサーチの間の通常の授業時の指導の影響が起因していると考えられる。

6. 事後アンケート

今回のトレーニングを通して、生徒の意識にどのような変化が見られるようになったのであろうか。事前アンケートと同じ質問項目によってその変化を見てみたいと考えた。

単語を見てそれを読む（発音する）ことは難しいですか。
（例えば、room という単語を見て[ru(:)m]と読む（発音する）こと。）

	事前アンケート		事後アンケート
ア　とても難しい	（1人）	→	（0人）
イ　少し難しい	（7人）	→	（4人）
イとウの中間	（1人）	→	（0人）
ウ　それほど難しくない	（9人）	→	（13人）
ウとエの中間	（1人）	→	（0人）
エ　とても簡単	（2人）	→	（5人）
無回答	（1人）	→	（0人）

「とても難しい」「少し難しい」と感じている生徒が減り、「それほど難しくない」「とても簡単」と感じている生徒が増えている。

事前アンケートの回答が事後アンケートではどのように変化したか、項目ごとに人数を見ていくと次のような結果となった。

(1) トレーニングによって困難度が軽減されたもの

事前アンケートの回答		事後アンケートの回答	
とても難しい	→	少し難しい	(1人)
少し難しい	→	それほど難しくない	(5人)
それほど難しくない	→	とても簡単	(3人)
「少し難しい」と「それほど難しくない」の間	→	それほど難しくない	(1人)
「それほど難しくない」と「とても簡単」の間	→	とても簡単	(1人)

11人(50%)の生徒がトレーニングによって困難度が軽減されている。

(2) 変化はないが、もともと困難を感じていないもの

事前アンケートの回答		事後アンケートの回答	
とても簡単	→	とても簡単	(2人)
それほど難しくない	→	それほど難しくない	(5人)

(3) 事前アンケートが無回答ではあったが事後アンケートで困難を感じていないもの

無回答	→	それほど難しくない	(1人)

(1)、(2)、(3)合わせて19人(86.4%)の生徒が、トレーニング終了時点で、単語を見てそれを読む(発音する)ことに困難を感じていない。

(4) 変化なし(依然として少し難しいと感じているもの)

少し難しい	→	少し難しい	(2人)

(5) トレーニングによって困難度が少し増してしまったもの

それほど難しくない	→	少し難しい	(1人)

発音のポイントの強調のしすぎや、トレーニングを一定期間集中して行ったことに対して「少し難し」く感じてしまったことが考えられる。

はじめて見かけた単語の読み方がわかりますか[1]。

	事前アンケート		事後アンケート
ア　自信を持って読める	(0人)	→	(0人)
イ　だいたい読める	(9人)	→	(17人)
イとウの中間	(1人)	→	(0人)
ウ　ほとんど読めない	(12人)	→	(5人)
エ　読み方を習わないと全く読み方がわからない	(0人)	→	(0人)

「ほとんど読めない」生徒が減り、「だいたい読める」生徒が増えている。

事前アンケートの回答が事後アンケートではどのように変化したか、項目ごとに人数を見ていくと次のような結果となった。

(1) トレーニングによって困難度が軽減されたもの

事前アンケートの回答		事後アンケートの回答	
ほとんど読めない	→	だいたい読める	(8人)
「ほとんど読めない」と「だいたい読める」の間	→	だいたい読める	(1人)

9人(40.9%)の生徒がトレーニングによって困難度が軽減されている。

(2) 変化はないが、もともと困難を感じていないもの

だいたい読める	→	だいたい読める	(8人)

(1)と(2)合わせて17人(77.3%)の生徒が、トレーニング終了時点で、はじめて見かけた単語の読み方に困難を感じていない。

(3) 変化なし（依然として困難と感じているもの）

ほとんど読めない	→	ほとんど読めない	(4人)

(4) トレーニングによって困難度が増してしまったもの

だいたい読める	→	ほとんど読めない	(1人)

(4)の「だいたい読める」から「ほとんど読めない」に変わった生徒は、表3における生徒Kにあたるが、テスト結果からいえば「だいたい読める」といってよい結果である。発音のポイントの強調のしすぎや、トレーニングを一定期間集中して行ったことに対して「ほとんど読めない」と感じてしまったことが考えられる。トレーニングの質と量についてさらに考慮して高めていく必要がある。

また、英語の音と綴りの関係の学習の効用についてもたずねてみた。

英語の音と綴りの関係がわかると、単語を覚えるのに役立つと思いますか[3]。

はい　20人　(90.9%)

理由：・説明が、とてもわかりやすかった。(1人)

・身近にある知らない単語を読める。読み方がわかる。前は、はじめて見た単語を読めなかったけど、だいたい読めるようになった。(4人)

・トレーニングをすれば、絶対にわかると思うから。(1人)

・どういう単語でも読めるようになると思う。(2人)

・覚えるのが速くなる。わからないときに使うと覚えられそう。(2人)

・言いながら覚えられる(書きながら言う)。(1人)

・役立つと思う。知らないより知っていた方がいいと思う。(2人)

・u を/ʌ/と発音したりするのが分かりづらかったけど、理解するとすぐ読めるようになった。(1人)

・ああ、そうなのか、と思った。(1人)

・なんとなく。(3人)

・無記入。(2人)

いいえ　2人　(9.1%)

理由：・たまに例外もある。その読み方だけではないから。(2人)

22人のうち20人の生徒が「音と綴りの関係がわかると単語を覚えるのに役立つ」と評価している。2人の生徒は「例外もある」と述べているが、ハイルマン(2000)によれば、特に母音の文字の持つ音の変化性は大きく、母音の文字と音の関係を明らかにしようとして、これまでに開発されたルールや概念はすべて、たくさんの例外を伴っている。綴りと音が明らかに

不一致ではあるが、しばしば用いられる単語については、sight word として覚えてしまうほうがよいという場合もあると述べられている。こうした文字の持つ音の変化性の大きさについて2人の生徒は認識しているということができる。音と綴りの関係の学習の効果については大多数の生徒の認めるところであり、今後、指導の順序や指導方法・教材等について検討し、改善していく価値はあるといえる。

7. おわりに

63.6％の生徒が英語は得意で好きであると答えているのに対して、36.4％の生徒は英語学習に対して苦手意識を持ち、その理由に語の学習の難しさをあげている。単語が覚えられない、単語の意味や読み書きが難しいなど、単語が読めない、書けないために英語学習に困難を感じている生徒は多い。そこで、音と綴りの関係を指導することにより、語彙の習得を助け、生徒の意識を高めていきたいと考えた。アンケートからもわかるように、音と綴りの関係の指導を行った結果、音と文字の関係に対する理解が深まり、語彙の習得や英語学習に対する生徒の意識が高まった。この結論は、分析対象のデータとしては、22名という限られたデータであるので、さまざまなコンテクストでのより深いリサーチが必要であるが、生徒の英語学習上の困難点を取りのぞき、学習意欲を高めるために意味のある指導法の一つであると提案することは可能であると考える。今後、系統的かつ効果的に学べるように、指導の順序や指導方法・教材等について検討し、工夫を加え、ていねいな指導を継続していきたい。

【註】

1　このアンケート項目は、鶴田(1998)の項目を参照した。
2　説明内容及び練習項目は、手島(2000)を参照した。
3　このアンケート項目は、鶴田(1998)の項目を参照した。

参考文献

藤原陽子(2002)「語彙指導 ——意味提示の方法と定着のための指導法の工夫——」 *Yamaguchi Studies in English and English Language Education* (山口大学英語教育研究会). 6, pp.1-11.

ハイルマン, A. W.(2000) .『フォニックス指導の実際』東京：玉川大学出版部 (松香洋子 監訳)

鶴田峰子(1998) .『平成9年度東京都教員研究生研究報告書　英語の運用能力を高めるための指導法の工夫　——語彙習得の指導を中心に—— 』東京：東京都立教育研究所教科研究部　外国語研究室.

手島良(2000) .『CDブック　スラすら・読み書き・英単語』東京：日本放送出版協会.

【付記】

本稿は、平成14年6月29日、第33回中国地区英語教育学会島根研究大会における口頭発表の内容である。また、金田道和教授（山口大学教授、現安田女子大学教授）に貴重なご示唆とご助言をいただいた。記して厚く謝意を表したい。